

保健の授業で育成される資質・能力に関する一考察

—指導者の指導観と生徒の記述に着目して—

○丸山 実花（お茶の水女子大学附属高等学校）、佐藤 健太（フランクフルト日本人国際学校・東京学芸大学先端教育人材育成推進機構共同研究員）

キーワード：新学習指導要領、資質・能力、コンピテンシー

1. 背景・目的

お茶の水女子大学コンピテンシー育成開発研究所（以下 ICD）では ICD コンピテンシーとして 10 の資質・能力の構成要素を定義している。

佐藤(2023)は、新学習指導要領における健康教育と資質・能力の育成との関連について考察し、保健の授業を通して ICD コンピテンシーにおける「批判的思考力」や「省察的思考力」は多くの学習活動で育むことができるものの、「協働性」、「対人問題解決力」、「自己制御」、「エージェンシー」の向上につながる機会が少ないとしている。

そこで本研究では、生徒からみた保健の授業を通して育成されたコンピテンシーを明らかにすることで、保健の授業で資質・能力を育成する取り組みや機会を検討する。

2. 方法

高校 1 年生女子 126 名を対象に、保健の授業が終わる 2023 年 3 月に、今年度の保健の授業を振り返り、身についたものや意識したことについてそれぞれの ICD コンピテンシーをキーワードとして記述してもらった。生徒の記述内容を学習活動ごとに分類し、佐藤(2023)と照らして比較した。

3. 授業概略

授業計画・内容は佐藤（2023）を参照された。なお、今年度の授業担当者は丸山であり、教師の指導観や取り組みに多少の差はある。

4. 結果

「批判的思考力」109 名、「協働性」120 名、「創造的思考力」83 名（含なし 3 名）、「他者理解」113 名、「問題解決力」90 名、「対人的問題解決力」69 名（含なし 7 名）、「省察的思考力」112 名、「自己制御」79 名、「内的統制感」103 名「エージェンシー」70 名の記述がみられた。

記述内容を分類すると、学習活動（ヘルススピーチ、人体実験レポート、グループ発表など）によるものだけでなく、保健の学習内容（喫煙、飲酒、精神疾患など）に関しての記述もみられた。

5. 考察・結論

本校の保健の授業では ICD コンピテンシーの「批判的思考力」「省察的思考力」が養われる場面や機会が多いことが示唆された。これは、保健の授業内容が自分を振り返り、見直し、改めていく機会がとりやすいことや、活動として自分の意見を考えて表現し交換する機会が設けられていることが影響していると考えられる。ただし生徒は教員が想定したよりも多くの場면을挙げており、担当教員がこまめに振り返りや短時間の意見交換の場を設けたことが要因として考えられる。

「協働性」や「対人問題解決力」については、3 学期に行われたグループ活動を挙げている生徒が大半で、教員の想定と一致していた。ただし、それ以外の記述もみられたため、そこに着目していくことで育成の機会が広がる可能性がある。

一方で、「自己制御」と「エージェンシー」は教員と生徒で大きく違いがみられた。保健の授業で学んだことをその後の生活に活かしている旨の記述や他の人へ影響を与える行動についての記述がみられ、これは個別の学習活動ではなく授業全体を通じて資質・能力が育成されていると生徒が捉えていることがわかった。また、これらは「使えるレベル」の思考になっているために記述されたものであり、現実世界の問題に対応できる資質・能力が形成されていることが示唆された。

保健の授業では生徒も資質・能力の育成を実感しており、その機会は教員が意図するより幅広い場面であることが示唆された。また学習内容自体の有用性もあるが、計画的で意図的な学習活動も資質・能力の育成に必要であることがわかった。今後は各学習活動の内容や深さにも着目したい。

6. 主な参考文献

佐藤健太(2023)コンピテンシー・ベースにおける保健で伸ばすべき資質・能力とは—10 年の歩みを振り返って—。お茶の水女子大学附属高等学校研究紀要 68. 67-82